

ホームページアドレス <http://www1.com.ne.jp/~mizumaki>

発行・カトリック水巻教会
編集・広報委員会
遠賀郡水巻町頃末南1丁目35-3
〒807-0025
TEL 093 (201) 0680 FAX (201) 7354
第304号

入院して感じたこと

広報・岩本

40 数年ぶりに入院をしました。本当に病気の人から見ると病人とは言えない程度でしたが、とにかく短期であっても入院しないといけないことになり入院しました。

かつて私の母が、体調の調整のために一年に何回も入院したとき、一週間もすると「帰る、帰る」と言い出しました。「また岩本さんの『カエル病』が始まった」と母は先生に笑われていました。しかし、私は今回の短期の入院で、あの時の母の気持ちが良く分かりました。点滴の針を刺された状態でトイレに行ったり、一日中することもなくベットにいることのつらさは身にしみました。

日本人の平均寿命が世界一だということが長く続きましたが、その一因は乳幼児の死亡率が低くなったことも大きかったと聞いたことがあります。私の母の兄弟・姉妹は8人でしたが、小さい時に何人か死んだのだという話を聞きました。今も開発途上国では子どもの時に病気で死ぬことが多いようです。

イエス様の時代も子どもは沢山生んでおかないと、成人する子がいなくなったようです。だから一夫多妻の習慣もあったと思われます。

旧約聖書では律法で食べて良いものと悪いものの定めがあります。ユダヤ教とイスラム教では今もこの食物の定めを厳しく守っています。新約聖書で、ゲラサの悪魔つきの話があり

ます。(マルコ5章1節～)

ゲラサというところはガリラヤ湖の北側の地名です。この箇所を読むと、ガリラヤ湖の周りには、イスラエルの民だけでなく、豚肉を食べる異邦人もたくさん住んでいたことがわかります。豚肉は冷蔵庫も無い時代は腐りやすく保存が難しいから禁止になったのではないかと思いますし、それ以外の律法で禁止された食べ物も、その時代には食べ物から死にいたるとする、正しい理由があったのでしょうか。

しかし、イエス様は「食べるものが人を汚すのではなく、人から出て来るものこそ人を汚す」(マルコ7章) と言われました。

イエス様は病気の人たちの癒しから活動を始めました。この時代は、いかに病気が恐ろしいものであったのかは理解できますが、心の癒しの方がもっと大切だとイエス様は考えられていたのだと思います。だからイエス様の癒しの中心は心だったと思います。医学の進歩で助けられている私たちは幸せなのでしょうか。

社会問題に向き合う・・・2・3面
聖書への案内・・・3面
心の健康セミナー・・・4面
典礼委員会議事録・・・5面
子どもたちのページ・・・6面
幼稚園より・教会学校のページ・・・7面
おしらせ・今月の聖人・・・8面

社会問題に向き合うカトリック教会の基本姿勢

先月号で、社会司教委員会が発行した「なぜ教会は、社会問題にかかわるのか」という本を紹介しました。

日本では自民党政権時代に憲法の改正が論じられてきました。カトリック教会をはじめとする宗教界は憲法九条の改訂に反対の意思表示をしました。その後、信教の自由に関する憲法20条の改訂も議論に上るようになりました。

私たちは一般社会の中に生きています。日曜日のミサを終えると、教会と全く縁のない社会の中で働いたり行動をしているのです。司教委員会は社会生活の中での問題をどのように考えるか、聖書や教皇の回勅や公文書を引用して解説しています。この本の中で、今すぐ知っていた方が良くと思われる箇所を10回程度転載することにしました。

Q1 教会はなぜ、社会問題について発言をするのですか？

A1 教会は初めから社会の中でともに生活する人々に関心を示し、社会問題に関しては福音書と使徒たちの手紙に基づいて教え、教父たちと中世の学者たちを通してその内容を整備し、教導権によって徐々に明確にしてきました。とくに教皇レオ13世の回勅『レームル・ノヴァルム』（1891年）に始まる歴代教皇の社会問題を取り扱う文書や発言、また第2バチカン公会議の『現代世界懸賞』などを通して、教会は人間の救いのために社会問題に対する解決の原則を示す義務を果たしてきました。

教会が社会問題について発言する最大の根拠は、神の独り子が限らない愛ゆえに、人類を罪と死から解放するため同じ人間となり 徹底して人々とともに生き、とくに死と復活によって人間に神とのつながりを取り戻させてくださったという事実にあります。イエスは、ナザレでの生活の後、とくに公の宣教活動の間「恵みの深い言葉」（ルカ4・22）を語り、徴税人など罪人と呼ばれた人々と食事をし、あらゆる病気で苦しむ人々を癒し、罪を許し、死者をよみがえらせました。そして最後には人間の手で十字架につけられ殺されましたが、復活して救いのわざを成し遂げられました。それはイエスの死が命をもたらす愛のわざだからです。（マルコ10・45、ヨハネ12・24 参照）。そしてご自分を救い主と信じる人々とともに、ご自分が示した愛によって交わる教会共同体をつくり（神の国の芽生え）、成長させ、完成へと導いておられます。（エフェソ1・4－14、コロサイ1・13－22）、教会はこの主キリスト、そのことばとわざを福音としてすべての人々にのべ伝える使命を与えられています。その福音化の使命は福音に「固有の力で人類を内部から変化させ、新しくする」ことにあります。福音化とは福音を各自の権利と義務、家庭生活、社会生活、国際関係を生きること、

正義と平和、開発と環境などの状況に当てはめて「キリストご自身が告げ知らせ、彼の犠牲を通して人間に与えられた」真の解放と進歩、救いを実現させることです。

確かに、人間の究極目的はこの世にはなく、父と子と聖霊の永遠の愛の交わりに加えられることにあります。したがって、教会もこの世に属しておらず（ヨハネ 17・16 参照）、神のことばと聖体に養われて愛しあいながら、神のもとでの永遠の幸福、天の祖国を目指して旅をしています。（フィリピ 3・20、ヘブライ 11・13-16、13・14 参照）

しかし、教会は、人となった神の子イエスご自身がそうであられたように、人間の共同体としては、人類の歴史と社会生活とに深く結びついており、喜びと希望、悲しみと苦しみをすべての人々と分かち合っています。それは、キリストが罪を除いてわたしたちのひとりとなってご自分をすべての人間と一致させ、わたしたち一人ひとりを深く愛してくださったからです。この意味で教会は、キリストが示した神の愛をあかしするためにこの世に遣わされています（ヨハネ 17・18、20-23 参照）したがって、人々と連帯し共生するだけでなく、キリストの福音を告げ知らせ、その精神によって社会を刷新し、そうすることによって人々に奉仕するのです。こうして、わたしたちキリスト者もすべての人とともにキリストによる救いにあずかるのです（コリント 9・23、27 参照）

ですから、教会は、福音を生活によってあかしするだけでなく、人間のいのちの尊厳と基本的人権、共通善などにかかわる諸問題を福音と教会の教えに照らして理解し、人々の救いのために必要であると判断するとき発言するのです。



聖書への案内 No.30 テサロニケの信徒への手紙 2

一回目の手紙を出した数ヵ月後に書かれたものというのが定説となっています。パウロはテサロニケで十分に教えることが出来なかったのが心配でたまらなかったのだと思います。そのため次のような記述があります。

「兄弟たち、わたしたちは、わたしたちの主イエス・キリストの名によって命じます。怠惰な生活をして、わたしたちから受けた教えに従わないでいるすべての兄弟を避けなさい。あなたがた自信、わたしたちにどのように倣えばよいか、よく知っています。わたしたちは、そちらにいたとき、怠惰な生活をしませんでした。また、だれからもパンをただでもらって食べたりはしませんでした。むしろ、だれにも負担をかけまいと、夜昼大変苦労して、働き続けたのです。援助を受ける権利がわたしたちになかったからではなく、あなた方が私たちに倣うように、身をもって模範を示すためでした。実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、「働きたくない者は、食べてはならない」と命じていました。」（3章6～10節）

パウロたち使徒は、自分で働きながら各地へ行ってキリストの福音を伝えたのです。



心の健康セミナー「病者とその家族」 矢田 公美

福岡黙想の家で、年4回、日曜日午後のひととき、精神科医小宮 豊氏を囲んで、心の問題について勉強会をしています。5月13日と8月26日の集まりは、同じテーマを取り上げました。一部を簡単に報告します。

本来、家庭・家族は子どもの成長・自立に向けた役割があって、外界から守られる閉じた社会になっています。家庭に病者が出るとその閉鎖性が破られ、様々な問題が指摘されます。

家庭内の「力関係の変化」が、幼児虐待、高齢者虐待、不登校と家庭内暴力などに関係しています。『共依存』という表現が紹介されました。1970年代後半に、アルコール依存の臨床で発見されたそうです。共依存とは、「他者に必要とされることに自分の存在意義を見いだすことで、アルコール依存者の家族（妻や子）の中で、依存者の世話をすることに、その人自身が依存してしまっている状況が発見されました。その人は、結果的に依存症を後押ししている事実がわかったのです。

また「子育て」「団らん」「地域との関わり」といった本来の家庭に存在すべき機能が健全に機能していない家族を『機能不全家族』といいます。子供は、自分の育った環境や考え方が一般的であると認識して成長しやすく、幼少期の重要な人格形成期において、愛情を得る機会が非常に乏しいと、自己愛・自尊心、他者への共感、他者の苦しみに対する理解に欠けた人間になりやすくなります。機能不全家族となる要因として、家族構成員のアルコール依存、虐待、共依存などが挙げられます。家庭の親、または祖父母などが機能不全家族で育った経歴の可能性も高いのです。生活能力に乏しい子供は不幸な状況から逃れることができず、歪んだ文化を全身に受けながら親や家庭に過大な気遣いをしながらの生活を余儀なくされます。周囲の児童がなぜ自由奔放に振る舞えるかが理解できず、他の児童の目から見れば非常に大人しかったり、異なる価値観や思考パターンで、いじめの対象にされることもあります。子供が自分の育った家庭の不健全さに気づいた場合、莫大なエネルギーを費やして、過去の生活習慣から脱却の努力をすることになります。また、育った環境の不健全さに気づかない場合、自己の配偶者として同様の歪んだ価値観を持ったパートナーを選ぶ場合が多く、成人してからも同様に不遇な人生を送る場合が多々あります。健全な家族経験の欠如や世代間連鎖が新たな機能不全家族を生み出してしまいます。無差別大量殺人や凶悪事件などで、犯人を精神鑑定したり、生い立ちを探っているうちに犯人の家族や親の思考、歪んだ家庭状況が発覚するケースがあります。しかし個人情報やプライバシー保護の観点からこうした側面が報道されることはほとんどありません。

以上は、勉強会のほんの一部です。小宮先生の事例紹介の後、質問や意見交換があります。同席の神父様もコメントされます。

次回は11月11日(日)午後2時からです。テーマは「死」に代表される危機と霊性の覚醒、です。よりよく生きるために、「死」から目を背けるわけにはいかないようです。

2012年度 第4回 典礼委員会議事録

開催日時：2012年9月12日(水) 19:30 場所：信徒会館

出席者：竹森神父、山本、安永、三谷、矢田

《報告事項》

1. 7月22日(日) 黙想の家研修会

講師：中村克徳神父「信仰を深めるために」参加11名

「からしだね」9月号に報告掲載。

2. 8月12日(日) 平和の集い(午後1時より小倉教会) 水巻から20名参加

・献金：26,200円(献金合計は608,816円 大槌ベースキャンプに送付)

・霊的花束：平和のための祈り(148)、ミサ(24)、ロザリオ(208連)、
主の祈り(162)、アベマリアの祈り(177)、小さな犠牲(36)

3. 典礼聖歌研修会(8/19 深堀純氏) 中止。

4. 田中健三郎さん：閉祭の歌をオルガン演奏中、

アブドゥハンさん：ミサ曲5を演奏予定。

5. 8月26日(日) 北九州信徒協典礼部会例会 (山本氏出席)

6. 9月15日(土) 聖母幼稚園創立50周年記念司教ミサへの協力。

7. 今後の予定

・11月4日(日) 堅信式、司教公式訪問

・11月23日(祝日) 教区の日

・2013年2月10日(日) 典礼部会研修会(全信徒対象) 小倉教会

講師：白浜満神父(日本カトリック神学院)

《審議事項》

1. 土曜日19時のミサ：必要に応じてお知らせで連絡する。

2. ミサ司会当番名を各月の典礼委員会案内で確認する。

3. 黙想の家研修会(2回目)を年度内に行うことができるか交渉する。(1、2月)

4. 10月の主日ミサ前、9:10よりロザリオ一連を唱える。黙想する神秘を事前に決める。

5. その他

・堅信式(9~10名) 入祭、拝領、閉祭の歌を選ぶ。

年間第31主日B年

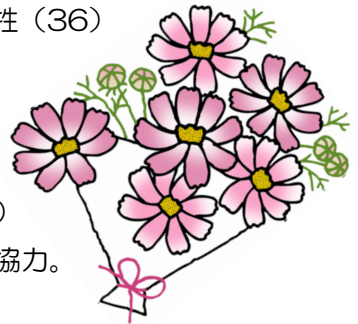
答唱詩編：典礼聖歌64(1,3,6)「神はわたしを救われる」

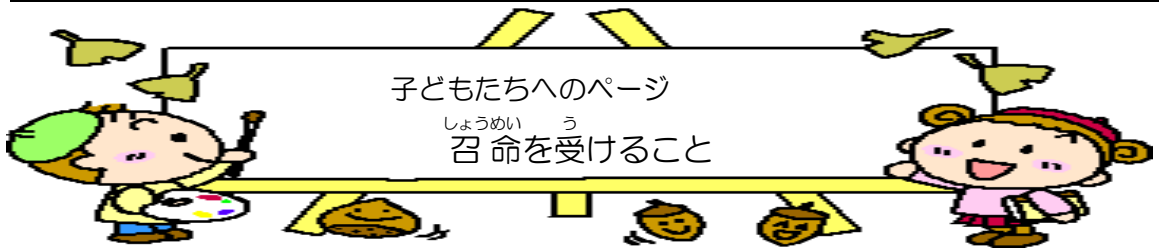
塗油：典礼聖歌161「よろこびの聖なる油」

・クリスマス(夜半ミサ)フルート演奏を依頼する。

「よろこびの聖なる油」：塗油の時。入祭、拝領、閉祭の歌をきめる。

次回予定 2012年 10月10日(第2水曜日) 信徒会館





よんせんねん むかし せかい よつ
四千年 くらい 昔 に、世界には四つの
ぶんめい はったつ おお ちいき
文明が 発達した 大きな 地域がありました。

いま くに
今の国でいうと、エジプト、イラク、イン
ド、中国 です。そして 必ず 川があるとこ
ろで文明が 発展したのです。

かみさま さいしょ まね
神様は 最初に アブラハムを 招きました。
アブラハムが 住んでいた 町は、チグリス川
の 近くで、その 頃の世界で 一番 大きな 町の
ひとつでした。今もその 町の 遺跡が 残って
います。

かみさま まね
アブラハムは 神様 から 招かれたので、
かみさま うたが すなお かみさま したが かぞく
神様を 疑 わず 素直に 神様に 従 って 家族
を 連れて 大都会から 旅に 出ました。その 時、
アブラハムは どこに 行くのか 分からないの
に、神様の 言葉に 従 ったのです。水も 食ベ
もの なん とかい みず かちく
物も 何でも ある 都会から、水も なく、家畜に
食ベさせる 草も 少ない 荒地に 出て 行っ
たのです。

しんぶさま たび で
ある 神父様は アブラハムが 旅に 出た こと
を、「アブラハムは 私 たちの 信仰 の

しゅっぱつてん い さいしょ かみ
出発点 です」と言われました。最初に 神に
したが ひと かみさま
従 った人だからです。だから 神様は、ア
ブラハムの子孫が 空の 星や 砂漠の 砂のよう
に 増えると 約束を します。

あと さばく も まえ
その後、モーセは 砂漠で 燃える しばの前
で 神様に 招かれ、イスラエルの 民を 連れ
て エジプトから 出て 行きます。

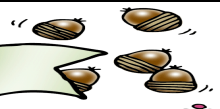
わたし かみさま まね
それなら、私 たちも 神様から 招かれる
ことは あるのでしょうか。みなさんは どう
おもいますか。こた 答えは「あります」です。

わたし だれ
私 たちは 誰でも いろいろな ことで
かみさま まね こま ひと たす
神様から 招かれています。困った 人の 助
けになる ことも、その 人に 会わせて くださ
る 神様の 招きです。その 中に 司祭や シス
ターになる 人が います。

がつ か しょうめい つど だいしんがっこう
11月3日は 召 命の 集いが 大神 学校
であります。その 時に、神様は 自分を ど
のような 道に 招いて くださっているのか
かんが 考 えて みてください。



水巻聖母幼稚園創立50周年



9月15日(土)、水巻聖母幼稚園創立50周年記念ミサを宮原司教様司式のもと、幼稚園関係者、水巻教会信徒の皆様と一緒に無事に行うことができました。

その後の茶話会では、司教様の挨拶・水巻町長様の挨拶に続き、前園長の池田千代子先生より、幼稚園開園当時の様子から今日までの歩みを話していただきました。小倉教会の山元神父の乾杯で、和やかな雰囲気の中、会は進みました。

この50年の歩みを改めて実感するとともに、今後も教会と共に、これからも幼児教育に力を注いでいきたいと思います。

創立50周年に関し、たくさんの献金をいただき、ありがとうございました。皆様方のご協力・ご支援に心より感謝いたします。

水巻聖母幼稚園 園長 田村 幸美
職員一同



教会学校のページ



9月23日 1・2・3年生クラス

1 今日の福音(マルコ9章30～37節)

みんなで読んで、わからないことばを話し合いました。

2 ロザリオの祈り(喜びの神秘)

1連を唱えました。後は2・3・4の黙想のことばを読んで、意味を考えました。



9月23日 4・5・6年生クラス

○マルコ9章30～37章の再読

自分の聖書で調べました。聖句に込められたイエス様が伝えたいことを考えました。

自分の心の支えとなる聖書の言葉に、出会おう！



10月のおしらせ

★ふれあい会よりお願い★

皆さんにゆっくりふれ合って頂くことを目的に、日曜日のミサ後に、お茶やコーヒーを用意して出しているグループです。

お家に余っている、コーヒーやクリープ、ココア、紅茶、砂糖、お茶の葉などがありましたら、ご寄付をお願いします。

★特別寄付★

高須・青葉地区の池尻紘子さんよりご寄付をいただきました。ありがとうございました。

★ホームレスの炊き出し支援★

日時：10月12日(金)10時～

場所：水巻教会 信徒会館

10時から信徒会館で弁当を詰めますので、エプロンをご持参の上、ご協力をお願いいたします。

人-ひと

【転入】ようこそ！水巻へ

吉村 力さん

長崎・中町教会より中間地区へ



今月の聖人 16日 聖マルガリタ・マリア・アラコクおとめ 1647年-1690年

マルガリタは、フランスのブルゴーニュのロトクールに裁判官の娘として生まれた。8歳のときに父を亡くし、修道院で教育され、彼女も修道女となることを望んだが、11歳のときに重い病にかかり、家に戻って4年間の闘病生活を送った。22歳のころに、いくつかの縁談が持ち上がったが、マルガリタは修道者となることを選び、1671年にパレーの訪問修道会に入った。彼女はどちらかというと、動きが人よりも鈍く、いろいろな面で苦しんだが、忍耐深く修行した。



1673年に、彼女が祈っているとキリストが現われ、「ごらんなさい。人々を愛するために多くの苦痛を忍んだわたしの心を。それなのに多くの人々は、この愛に対して冷淡で、受けた恵みを忘れていきます」と言われ、「み心の信心」を広めるように命じられた。初めは、多くの反対にあったが、次第に「み心の信心」は広まり、マルガリタの死後、この信心は全世界に広がった。1856年、教皇ピオ9世によって「み心の祝日」が定められた。